

活動報告

たとえ困難な道でも、予想できない“美しい瞬間”を信じる

—ホスピタルシアタープロジェクト 2023「鳥の歌」からの学び—

古賀弥生 河村竜也

Even if the Tough Road, We Believe in Unpredictable “Beautiful Moments”:

Learning from Hospital Theatre Project 2023 “The Songs of Birds”

KOGA Yayoi KAWAMURA Tatsuya

(2024年3月2日受付, 2024年9月30日発行)

1. ホスピタルシアタープロジェクトについて¹⁾

ホスピタルシアタープロジェクト(以下、HTP)は、障がい児・医療的ケア児とその家族がリラックスして演劇を鑑賞できる多感覚演劇である。HTPは、NPO法人シアタープランニングネットワーク(以下、TPN)が2010年度、教育や福祉の場で活用しうるクラウン手法を学び施設や病院を訪問する事業を実施したことが端緒となった。その後、2011年度の「クラウン&アクター協働プロジェクト」を経て、2012年度からホスピタリティとしての演劇を届ける「ホスピタルシアタープロジェクト」と名称を変更し継続されている。2016年度以降、舞台と観客を区分し観客はじっと大人しくしていただくという「約束事」に疑問を覚えたTPN代表の中山夏織が、英国の劇団「オイリーカート」からの以下のような学び(一部省略している)をもとに、さらに自由で温かな作品を創作し、病院や児童放課後デイサービス、障がい者福祉事業所、劇場や大学など様々な場へ演劇的な喜び、楽しみを届ける活動へと進展させた。

〈多感覚演劇〉

五感を刺激し、美しい体験を提供する様々な想像的な遊びとビジュアル。

物語を届け、わからせるのが目的ではない。

〈少人数の観客〉

障がい児のための公演の場合、1公演あたり6家族程度。

家族・介護者も楽しみながら、パフォーマーとともにケアする存在。

〈舞台と客席〉

子どもたちを制限しない自由なレイアウトと安全な環境。

〈一人ひとりに寄り添う〉

子どもの反応に反応していくテーブルトップパフォーマンス。

〈年齢や異なる障がいへの対応〉

同じ作品でも、構成・内容の変更を行う。

障がいによっては、記憶を長く留められない子どももいる。

同時に多くのことを把握・処理できない。ムーブメントは一つひとつ。

シーンとシーンのあいだの「深呼吸」

HTPは「じっとしていられなくてもいい／座っていられなくても、寝転がったままでも／声をだしても大丈夫」(「鳥の歌」HPより)と呼びかける。プロデューサーでもあるTPNの中山は「障がいのある子どもたちの親は、そもそも劇場で観劇することができると思っていない場合がある。そうではなく、誰でも楽しめる作品を提供したい。親が安らげる、大人が癒されるひとときを提供することの意義もあると思

う」という。その思いを実現する「すべての子どもたちとその家族のための多感覚演劇」として、現在は毎年のように新作を創作しツアーを行っている。

23年度、HTPは文化庁障害者等による文化芸術活動推進事業に採択され、NPO独自に寄付を集める「TPNファンド」等により資金的な支えを得た。

2. 豊岡公演「鳥の歌」概要

豊岡公演が実現した発端は、22年の「りっかりっか＊フェスタ」（国際児童・少年演劇フェスティバルおきなわ）を視察した筆者（古賀）がこの年のHTP作品「迷いの森」を那覇文化芸術劇場なは一とで鑑賞したことであった。「深さをもった演劇のまちづくり」を進める豊岡市で、演劇の力を活用した地域活性化を学ぶ芸術文化観光専門職大学に招聘するにふさわしい作品であると感じた筆者が中山との間で協議を進め、23年度の文化庁の上記事業への申請に豊岡公演を組み込んでもらえたこと、大学の共催という位置づけができ教職員のサポートも得られたことから「鳥の歌」豊岡公演が実現した。

なお、10月の公演に先立って6月12日に中山を大学へ招き、学生と教職員を対象に特別講座を開催した。27名の参加を得て、演劇を通じた社会包摂につながる取り組みの理念や実践ノウハウを学んだ。このときに参加した学生の中から公演当日のサポートを行うアルバイトを7名依頼した。

「鳥の歌」公演の概要は以下のとおりである。

（日時）＊上演時間約1時間

2023年10月14日（土）11:00／14:00 10月15日（日）10:30／12:30

（会場）芸術文化観光専門職大学 静思堂シアター（チケット）大人1名＋子ども1名 2,500円（追加チケット 大人1名1,000円、子ども1名500円）見学者 2,500円

（定員）各回6～8家族（実参加者数52名 内訳：4回の公演合計で7家族21名＋見学者14名の事前申し込み、当日参加17名）

（申込み方法）メールまたはGoogleフォーム

＊申込みの際、子どもの苦手なもの、配慮の必要な事項を確認

＊自閉症などの参加者のために事前資料を用意

（カンパニー・オブ・ホスピタリティ 2023 豊岡公演）

遠藤真理子（作曲）

尾形典子

（アクセスコーディネーター・江原河畔劇場）

緒方理麻（ヴァイオリン・舞台監督）

木村綾香（ピアノ）

古賀弥生（監修・芸術文化観光専門職大学）

寒川明香（ダンサー）

中本琴絵（コントラバス・作曲・桐朋学園大学）

中山夏織（プロデューサー）

夏村比奈（ダンサー・舞台監督）

水上静（俳優）

渡邊清楓（俳優）

（協力）

河村竜也（芸術文化観光専門職大学）

主催 文化庁／特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

共催 兵庫県公立大学法人芸術文化観光専門職大学

【公演の構成】

ひとりの旅人と鳥たちが登場。言葉はなく、さわったりにおいを楽しんだりする劇。5つのシーンで構成され、各シーンの終わりには深呼吸をする。

- ・旅人が本を開くと光があふれ、鳥が飛び出してきて旅人をからかう。鳥は参加者と一緒に森の木漏れ日と遊ぶ。
- ・大きなたまごと不思議なシャボン玉。
- ・大きな空と風。風を切って飛ぶ鳥のダンスと、舞い上がる旅人。
- ・夜の舞踏会。夢の中で踊る鳥と旅人。
- ・フィナーレーネームソング。参加者一人ひとりの顔写真をスクリーンに投影しながら名前を全員で歌う。

公演後にプロデューサーの中山と出演者から、作



写真1 五感を刺激するさまざまな仕掛け
(写真提供: NPO 法人シアタープランニングネットワーク、以下同じ)



写真2 公演の様子①



写真3 公演の様子②

品創作の過程や込められた思いなどを聞いた。そのメモも合わせて記載しておく。

- ・カンパニーは音楽班、ダンサー班、俳優班からなる。メンバーはプロデューサーから教え子に声をかけたり、オーディションで集めたりしている。

- ・最初にプロデューサーがキーワードを示す。今回は「鳥」。
- ・作品づくりは音楽が先行。今回の場合4つのシークエンスに分かれ、パフォーマーチームがそれぞれに担当者を決めるなどして作っていった。
- ・全体の調整に多くの時間をかけている。各シーンのつながり、会場の広さなどの条件、参加者の状況に応じて微調整を繰り返す。曲数を多く用意し複数のバージョンをつくっておく。
- ・ストーリーを覚えられない子どももいるため、物語よりもその瞬間の美しさを感じ取れることを重視している。
- ・最後のネームソング(一人ひとりの名前を全員で呼ぶ)をメインとしているので、そこにつながるように創作している。
- ・道具類は、自宅に戻っても身近なもので同じ遊びができるように考えて採用している。
- ・今回は4回目の公演に大きな音が苦手な子が参加するとわかっていたので、ピアノの弾き方も音を少なくするなど音量を調整していた。過去にはバイオリンの音が苦手な子がいるとわかると、本来は前方にいるバイオリン奏者が後ろに引いたこともある。今回はコントラバスが入ったので楽器に衝突する子どもがいるかもしれないと想定し、(コントラバスが登場する曲を冒頭に置かないなど)曲順を工夫した。
- ・本公演に出演した7名以外の出演者もいて、メインのダンサー2名以外は常に入れ替わっている。メンバーが変わればまた違う作品になる。

3. 公演当日に至る準備

本章では、公演当日までの準備について、広報・制作面とテクニカル面の2点から詳述する。

3.1. 広報・制作面

広報に関しては江原河畔劇場の制作業務を担当する尾形の協力を得て、豊岡市内の特別支援学校にチラシを持参し全児童・生徒への配布を依頼、

小学校特別支援学級、放課後デイサービス等にもチラシを郵送した。豊岡市とその周辺に居住する障がいのある子どもたちにはほぼ全員に情報を届けられたはずだが、参加申込は芳しくなかった。

原因としては、地域の祭りなど別の催しとの日程重複があったこと、兵庫県内で初めての取り組みでありチラシで情報を得たとしても申込をする行動を起こすまでには心理的距離感があった可能性が推測される。

また今回、地元新聞社等へ記事掲載の依頼も行ったものの反応がなかった。

3.2. テクニカル面

企画打ち合わせ時から参加者を空間全体で包摂するカンパニーの意図が感じられたため、受入側における技術面のサポートに際してもそれをできるだけ実現するように心がけた。

① パネル設置

パフォーマーが上手、下手の袖中で着替えたり小道具を準備するため幾度かの出はけが行われる。そのため、この空間は行動制限をしないとはいえ参加者にあまり入ってきて欲しくないエリアでもある。死角になり、パフォーマーからの目も届きにくいいため、フォロー対応ができないという理由もあったかと思う。そのため、ハの字型にパネルを設置し、参加者の視野をフォーカスすることにより、舞台袖の中に意識が行きにくいように心がけた。通常、目隠し用のパネル（見切れパネル）は客席からあまり目立たないように設置するものなのだが、あえてハの字に目立つように設置をすることでその裏側に意識が行きにくいようにしたのである。また、舞台袖に参加者が入ってきた時のことも考え、袖中の空間を広めにとることで、余裕を持って対応できるよう安全にも配慮した（実際、本番中に観客の子どもが入り込んだこともあった）。さらに、パネルも必要以上に高さが無いものを選んだ。参加者の目の前に大きなものがそびえ立つことで緊張感を与えてしまわないようにするためである。

② 椅子席と舞台空間

客席については、椅子席がなく、舞台面も含めて

フルフラットでバリアフリー仕様であった。舞台と客席の境界線の明示もなく、主体的に参加できるよう受付、入場、着席と、各ポイントに仕掛けや配慮がなされていた。視覚、聴覚、触覚だけでなく、よい香りのするスプレーが撒かれるなど、臭覚を刺激する工夫もあった。地面に座る際、床の冷たさや固さが、緊張感を与えかねないため、柔らかいクッションやマットを用意するなど素材選びにも配慮がされていた。バリアフリーとは、ただ単に空間を物理的にフラットにすることだけでなく、仕掛けや配慮により精神的な障壁を取り除くことも重要なことであることに改めて気付かされた。そういった意味では、音響、照明の利用が最小限で、これは最小限であることが重要なのではなく、「見えないところから音や光によって演出される」ということがなかったことがバリアフリーにおいては効果的であったのではないかと思う。照明は上空バトンには何も吊らず蛍光灯のみで、舞台上にセットの木を照らすためのものが一台あったのみである。楽器は生楽器で、ピアノも電子ピアノから出る電子音のみであった。

4. 参加者の反応

ここでは参加者アンケートから、本公演に対する参加者の感想等を記録する（抜粋）。

① 子どもの様子について

- ・自分のタイミングで楽しむことができ、リラックスしていた。五感を使って空間を味わっていた。
- ・すごくよかったです！“さあ、やりましょう！”みたいな圧が一切なく、子どもが自然と体と心が動く様子が見られました。
- ・初めての場所が苦手な子ですが、後半慣れて居心地よくしていました。姉、弟もそれぞれに楽しそうにしていました。

② 保護者の感想など

- ・とっても癒されました。生の音楽、眼前で繰り広げられるダンス、ぜいたくな時間でした。
- ・子ども可の公演でもいつも遠慮がちになってしまいましたが、今回は子どもの反応や行動をすべて受け入れてくれ、とても感動しました。

- ・どのような立場の人でも芸術に触れることができる機会がもっともっと広がれば、生きていくことが豊かになると思います。
- ・外出しやすいよう、家族以外にも手伝ってもらえる仕組みがあれば、もっと参加しやすいだろうと思いました。

5. 学生スタッフのコメント

本公演では上述のように7名の学生アルバイトを依頼した。学生には受付業務のほか、公演中の子どもたちのサポートなどを担ってもらった。出演者やプロデューサーの話を聞くこともでき、大きな学びの機会にもなったと思われる。

以下、公演後に学生から寄せられたコメントの一部を記載する（一部編集）。

① 観客の様子で印象に残ったこと

- ・金と銀のアルミホイルのようなシートが近づくと、それまで耳を塞いだり、お母さんに抱きついていたり子が自ら光を当てていた。その子がどうしてそうしたのか、何が見え、何に見えていたかは分からないがその行動をしたきっかけや感受性は必ずある。大きくなってしまった自分には沸き起こらない発想がたくさん散らばっていて素敵な時間と空間だった。
- ・座っている場所の近くに移動してきたお子さんと、（恐らく知人ではない）大人の方が千切った紙と一緒に遊んでいたこと。作品を通して劇場内に観客同士の関わり合いが生まれていることが衝撃的であり、また非常に貴重な瞬間を目にしたと感じた。

② 出演者等の話から印象に残ったこと

- ・創作過程では予想できない“瞬間”を信じて、常に観客とコラボしようとする姿勢に、困難な道を歩まれているのだと感じた。同時に、皆さんの意欲的な姿勢とこだわりに、困難なところを楽しさと意義を見出していると思えた。
- ・「活動を続けていくにあたって、来場者がアンケートに回答することが一番強力な助けになる」という中山さんのお話が印象に残った。企画終了

後の成果検証の重要性については理解していたつもりだったが、「なぜ重要であるのか」を改めて強く認識することができた。

③ その他感想

- ・作品だけでなく、お客さんの楽しそうな反応、子どもを見るお母さんの目、他の家族やお客さんを見守るすべての人達の温かい空間が胸に来了。ここは安全だよという場所は誰にでも必要だなと強く思った。
- ・障がいを持つお子さんと健常のきょうだいが一緒に来ていた。（中略）以前読んだ記事に、きょうだい児が将来を考える際、障がいのある子の介助をすることを前提に話を進めると記されていた。そんな家族がゆるく繋がれる環境がHTPのような「鑑賞」から展開していったら嬉しいなと感じた。

6. 総括

参加者アンケートからは、子どもの行動を妨げることなく楽しめる場であること、家族も楽しめる機会であることへの高い評価が窺われる。

また学生にとっては、アーティストの「表現」であるだけでなく鑑賞者のために行われる創作のあり方や作品が与えるインパクトを目の当たりにする機会となった。

本公演の最大の課題は集客であった。日程の不都合もあったものの、当地の障がいのある子どもと家族の舞台鑑賞に対する心理的なハードルを痛感した。また、マスコミの反応の薄さも残念であった。回数を重ねることで徐々に変化することを期待したい。

注

- 1) 本章はNPO法人シアタープランニングネットワーク及びホスピタルシアタープロジェクトのWEBサイトより構成した。最終閲覧日：2024年3月2日
<https://tpn170.wixsite.com/mysite>
<https://tpnkaorinakayama.wixsite.com/htp>2019